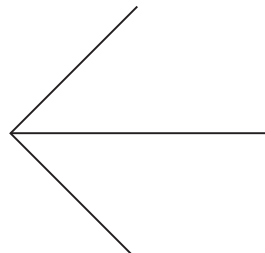
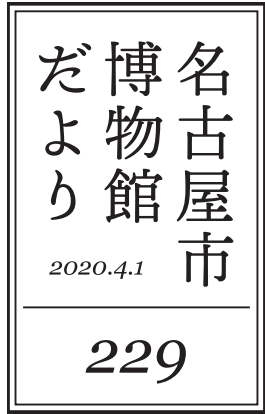


渡辺清
柿本人麻呂像

名古屋の風



一銭活動写真機
エルモ社製
光学機械資料より



B29 空襲日誌



名古屋博物館だより 229 号
令和 2 年(2020) 4 月 1 日
年 2 回(10 月、4 月)発行

編集・発行／名古屋博物館
〒 467-0806
名古屋市瑞穂区瑞穂通 1-27-1
TEL 052-853-2655
FAX 052-853-3636
http://www.museum.city.nagoya.jp

古紙を含む再生紙使用



図版 1 「エルモ A 型」
昭和 2 年(1927) 発売

み込まれている
(図版 3)。箱の
前面の投入口に
一銭銅貨を投入
すると通電する
仕掛けになって
いて、穴から内

部を覗き込むと奥の二十センチくらいのスクリーンに二分間
だけ活動写真(映画)が投影されるのが見られる。中に組み
込まれているのは改造されたモーター駆動のエルモ社製映写
機である。フィルムは 16 ミリを使用し、交換しなくてもよい
ように循環式になっている。箱の高級家具のような彫刻が目
を引くが、創業者の榊秀信が手ずから作ったものだという。
彼は少年時代に家具店で奉公し、大工の修行もした経験が
あったのだ。

さて、この一銭活動写真機、数台は作られたらしいが、会
社には一台しか残っていなかった。エルモ社の記録を見ても、
製品として量産されたものではない。販促のためのデモ、新
製品開発のための実験、個人的な趣味のためなど様々な可能

B29 空襲日誌

加藤和俊

これは昭和十九年(1944)
十二月十三日から翌二十年
(1945)三月十二日大空襲の
翌日、十三日までのちょうど四か
月にわたり、名古屋空襲の実況を
記した日誌です。地上での空襲被
害だけでなく、襲来するアメリカ
の巨大爆撃機ボーイング B 29 の
空中での動向を観察に基づいて毎

回克明に記録している点で、他の同様の空襲記録とは一線を
画しています。編隊であるいは単機で飛来する B 29 につい
て、どの方面から侵入しどう旋回しどこへ離脱したか、その
経路・航跡の観察結果が、知りえた被害状況と共に記録され
ています。筆者で現在大阪府に住む二村允さんは名古屋生ま
れ。この日誌の当時は南区の笠寺近くに住む旧制尾張中学校
(名古屋大谷高校の前身) 四学年でしたが、港区の住友金属
工業株式会社名古屋軽合金製造所に勤労働員され、自宅から
電車で通勤していました。家や勤務先が名古屋南部だったた
め、名古屋市上空及び南は大府あたりまでの空が見渡せたそ
うです。来襲した B 29 が自分の方に飛んで来るのかどうか、
爆撃機の進路は地上の死命を決するので、空襲時は皆が一樣
に天を見上げていたのです。

まさに観察日記

もともと日記をつけていた二村さんは、昭和十九年十二月
十三日に名古屋への本格的空襲が始まると、寝る間も与えず
飛来する爆撃機の実態について、日記の延長として、「国語」
授業用に用意していた小ぶりのノートを転用し、記録をつけ



図版 1 2 月 15 日空襲の B29 飛行経路

トモナカタ。不発弾カ何カ知ラヌガ何トモナカ
ツタノデオカツタ」(三月五日)。大型爆弾なら爆
風は直径数百 m にも及ぶので逃れられせん。自
分のすぐ近くに爆弾や焼夷弾が結果的には投下さ
れずに終わっても、敵機来襲による死の恐怖は投
下の場合同様に地上にまき散らされたのです。
恐怖の一方で「真白イ胴、尾カラハ四筋ノ線ヲ
ヒキ真ニ見事デアル」(十二月十三日)とか、空
襲警報が出ても味方の飛行機しか見えない時は
「退屈デアツタ」(一月九日)と書くなど、感じた
ことで当時口に出すことが憚られるような感想も
率直に記入しています。B 29 を迎撃した味方の攻



図版 2 3 月 12 日空襲の B29 への迎撃の様子

一銭活動写真機
エルモ社製光学機械資料より
酒井康平

活動写真(映画)のフィルムが、またたくまに地球全体をぐ
るぐる巻きに巻いてしまった。すると、この活動写真を、素
人の手で簡単に写して楽しめるものかといふ、当然の要求
が起つてきた。そこで小型映画が発明された。

殿島書人「小型映画研究」名古屋小型映画協会 1930 年。(括弧内筆者)

映画が発明されて以来、使用されるフィルムは 35 ミリ幅で
あった。映画というものを思うがまま制作し、自宅で鑑賞し
たいというのは映画好きの夢であったが、35 ミリ映画撮影機・
映写機は大きく、個人用の趣味としては荷が重かった。また
フィルムは高価だった上、映写には技術が必要で発火の危険
すらあった。これらの要求に応じて登場したのが扱いやすい
小型映画であり、8 ミリ、9.5 ミリ、16 ミリなど小さなフィ
ルムを使用するものを総称してこう言う。1922 年にフ

性があるが、会社に伝わっている話によると実際に町中に置
かれて有料で稼働していたらしい。コーヒー一杯十銭の当時、
一回見るのに現在の数十円くらいの感覚だったであろうと思
われる(ちなみに映画館は三等席でも五十銭だった)。

一度に一人しか見ることができない一銭活動写真機は、エ
ジソンの発明したキネトスコープや、江戸時代の「のぞきか
らくり」に近いものだ。大正末期から昭和初期は日本映画第
一黄金期とも呼ばれる映画隆盛期である。名古屋でも大須を



図版 2 「一銭活動写真機」
450 × 725 × 660 (mm)、昭和 3 年(1928)



図版 3 「一銭活動写真機」の内部

始めました(全三十八ページ)。文章は、少年であった二村
さんの見、聞き、感じたことを空襲終了のたびに率直な言葉
で書き綴ったもので、実に生々しいものです。内容は、既に
知られている空襲の記録と照らし合わせても非常に正確で、
かつ補いうる可能性も含む(波状攻撃で侵入する各編隊の順
序・航跡など)ことが注目されます。期間中、何も投下せず
終わった飛来についても漏らさず記録されているようです。

また、数えた敵機の数などの二村さんが見たままの情報だけ
でなく、空襲後に発表された「戦果」来襲機数・撃墜数・撃
破数、「我方ノ損害」機数といった大本営発表の情報を文末
に併せて記入するなどしています。日誌が始まった十二月
十三日はいきなり猛爆でした(東区大曽根の三菱重工業名古屋
屋発動機製作所が壊滅)。B 29 が次々に自宅の真上を通過す
るため「二時間モ上ヲ見テ居タノデ首ガ痛クナツタ」とあり
ます。また航跡の図が特に詳細なのは二月十五日の空襲です
(図版 1)。十回に及ぶ単機または編隊がどの方面から侵入し、
どのように旋回したか、多くの経路を区別するため色鉛筆を
用いて図示しています。しかし時には、雲あるいは「シマヒ
ニハ火災ト煙デ空ハ曇リ敵機ガ来テモ分カラナクナ」(三月
十二日の大空襲)って観察不能になることもありまし

恐怖のなかの冷静

内容のいくつかを紹介しましょう。

「爆音ト同時ニ爆弾投下、真上ヲ通過シテ東北方ニ到リ又モ、
爆弾投下 コレハ相当近カツタ、自分ノ上デ落サズニ行ツテ
ヤレヤレト思ツタ」(二月二十四日)。「ウチノ真上ヲ通過南
方ヘ脱去 家ノ上デ投弾シナクテオカツタ」(二月十五日)。

トモナカタ。不発弾カ何カ知ラヌガ何トモナカ

ツタノデオカツタ」(三月五日)。大型爆弾なら爆

風は直径数百 m にも及ぶので逃れられせん。自

分のすぐ近くに爆弾や焼夷弾が結果的には投下さ

れずに終わっても、敵機来襲による死の恐怖は投

下の場合同様に地上にまき散らされたのです。

恐怖の一方で「真白イ胴、尾カラハ四筋ノ線ヲ

ヒキ真ニ見事デアル」(十二月十三日)とか、空

襲警報が出ても味方の飛行機しか見えない時は

「退屈デアツタ」(一月九日)と書くなど、感じた

ことで当時口に出すことが憚られるような感想も

率直に記入しています。B 29 を迎撃した味方の攻

ランスのパテ社が 9.5 ミリ幅で不燃性の安全フィルムを使用し
た「パテベビー映写機・撮影機」を発売して以来、小型映画
は本格的に世界へ普及していった。

昭和の初め、小型映画用の映写機を初めて日本で作ったの
は名古屋のエルモ社であった。大正十年(1921)、榊商
会(後のエルモ社)はカメラ修理と写真機材製造販売業とし
て創業する。昭和二年(1927)、国産初の 16 ミリ映写機「エ
ルモ A 型二」(図版 1)を発売し、以来小型映画機器専門メー
カーとして発展していった。

名古屋市博物館は平成三十年度、エルモ社に保管されてい
た光学機械資料の一部を寄贈していただいた。資料はすべて
同社が製造したもので、小型映画用映写機を中心として、約
百点の小型映画カメラ、スライド映写機、スチルカメラ、エ
ディターなどからなる。エルモ社の軌跡、そして日本の小型
映画機械の展開がわかる体系的なコレクションである。

ここからぜひ紹介したい一点が、変わり種の「一銭活動写
真機」(図版 2)だ。この資料は、昭和三年(1928)製
造されたものと記録があり、木製の箱の中に小型映写機が組

(次ページへ)

中心にサイレント映画の最盛期を迎えていた。現在と同じよ
うに、映画館の大スクリーンで一度に大勢の人が同じ映像を
共有するという映画体験がすでにスタンダードになっている
時代である。この活動写真機は小型映画の手軽さを生かして、
映画館とは違った、たった二分の手軽な楽しみを人々に提供
していたのだろう。

「エルモ A 型」「一銭活動写真機」は令和二年(2020) 六月二十四日、
八月二十三日まで常設展内フリールームにて展示予定です。

撃による敵の被害についても書かれています(図版 2)。
「南方へ遁走シテ行ク途中一機編隊ヲ離レ高度モ下リ、白イ
煙ヲ出シナガラ逃ゲテ行ツタ」(十二月二十二日)。これは米
軍の記録でこの日失われた三機のうちの二機とみられます。
「急ニヨロヨロニナツテ機首ヲ下ゲフラフラニナツテグン
ン落チテイツタ」(三月十二日の大空襲)との記録もあります。
最後の記述。

この日誌の末尾は昭和二十年三月の、「十八日」「晴」とい
う文字でブツンと終わっています。翌十九日は前回を上回る
大空襲にさらされ、もはや日誌どころではありませんでし
た。二村さん以外の家族はついに疎開。勤労働員中の二村さ
んは中学を繰り上げ卒業、自宅を出て引き続き実務科生とし
て工場の寮に入るなど、生活環境が激変していたのです。そ
の後も昼夜を問わず逃げ回ったことが数知れないと振り返
中の、「特に忘れ得ない一つだけ」として二村さんからメモ
書きをいただいたのが、昭和二十年六月九日の空襲です。警
戒警報発令で工場から散り散りに逃げた学徒らが警報解除で
工場に戻りつつある時のこと。突如今度は空襲警報のサイレ
ンが鳴り、同時に二村さんの頭上を超低空で B 29 の編隊が
猛スピードで通過、氏の前方に見えていた職場に爆弾が雨ア
ラレと落とされました。たどり着くとほとんどの建物は破壊
され、あちこちに死体と負傷者がうごめく修羅場でした。そ
の晩、寮の同室で金沢の中学から動員されて来ていた学徒が
戻らず、翌日、工場の遺体置き場で彼の亡きがらを発見しま
した、という内容です。この令和のメモ書きを、昭和二十年
三月に書きかけで終わったこの空襲日誌の、最後の記述」と
して、一緒に大切に保管していこうと思います。

渡辺清

柿本人麻呂像

藤田 紗樹

わたなべきよし 渡辺清(1778-1861)は、名古屋の本町で縫箔屋を営む家に生まれ、名古屋を拠点に活躍した絵師である。14歳で狩野派の町絵師吉川英信・義信父子に絵を学び、のちに京都に出て、宮廷の絵所預をつとめていた土佐光貞(1738-1806)の門に入った。清は熱心に土佐派の画法を学んだが、故郷に残した母のため、3年後に名古屋に戻り、長者町(現：名古屋市中区)に住んで画塾を開いた。温雅で朴訥とした画風が名古屋で人気を博し、数多くの作品が伝存している。

今回紹介するのは、清筆の「柿本人麻呂像」である(図版1)。柿本人麻呂は『万葉集』の代表的な歌人で、後世には歌聖(和歌に優れた人物)として尊崇され、和歌の上達を願って盛んにその姿が描かれた。本作は縦43.8cm×横65.7cm、絹本著色の掛幅で、以下の通りの和歌を含む賛がある。

なるかきのもとその身は下ながら
言の葉たかくあふくこの神
こはやくよめりし歌にしてことし文政九年冬書たり
平大平

平大平は、本居宣長の弟子で、のちに宣長の養子になり本居家を継いだ本居大平(1756-1833)である。清は宣長の長男春庭(1763-1828)に和歌を学んでおり、本居家の人物と交流があったようだ。本作以外にも、清の絵に大平の賛がある作



図版1 渡辺清筆・本居大平賛「柿本人麻呂像」 館蔵

品が数点知られている。

和歌は、「かきのもと」を読み込んだ物名歌(物の名を詠み込んだ歌)で、文政9年(1826)の冬に詠まれたことがわかる。絵もおよそ同時期の成立、すなわち清49歳の円熟期の作品と見てよいであろう。謹直な描線、堅実な人体把握、穏やかな雰囲気を含えた人物の表情は、清の作品にみられる特徴をよく備えている。

時代を越えて数多く描かれてきた人麻呂像には、さまざまな姿がある。そのうちもっとも一般的な図様は、平安時代の貴族藤原兼房(1001-1069)が夢に見た人麻呂の姿、すなわち、(図版2)の「柿本人麻呂像」のような、直衣(貴族の平常服)姿で薄色の指貫(裾が紐でくれる袴)を履き、紅の下袴を着け、菱烏帽子を被り、右手に筆を、左手に紙を持ち、歌を案じる様子で宙を見つめる「兼房夢想系」と呼ばれる型である。

字面だけ追えば、本作の人麻呂も兼房夢想系と一致するかと思われるが、兼房夢想系の人麻呂は、右ひざを立て、左手の紙が巻紙であることが多い。また、装束も兼房夢想系の人麻呂は菱装束で描かれるが、本作は装束にやや硬さが残る表現であるなどの違いがある。

結論を先に述べれば、清の人麻呂像は、秋田藩主・佐竹家に伝来した歌仙絵の傑作、佐竹本「三十六歌仙絵」(13世紀成立)の山辺赤人の姿を借用して描かれたようだ(図版3、4)。山辺赤人は、人麻呂とともに歌聖と仰がれた『万葉集』時代の歌人である。画面右を向き、やや上を見上げた顔、弧を描いて下がった眉、目尻に入った皺など、人物の造形は近似する点が多い。また、硯箱の傍らに墨が置かれ、硯には墨を摺った形跡が残るところまで共通する。佐竹本の赤人の姿を参照したことは間違いないであろう。



図版3 渡辺清筆・本居大平賛「柿本人麻呂像」 部分 館蔵

ここで、清は人麻呂ではなく赤人を描いたのではないかと疑問も生じるが、浮線綾文様が配された白の袍(裏地の縹色が透けて水色に見える)と縹色の指貫、袖からのぞく赤の単という装束は、近世の人麻呂像によく見られ、また、赤人のように指貫の裾から足をのぞかせる人麻呂像の例は少ないことから、人麻呂として描いたと判断できる。人麻呂を描くに赤人の図様を用いた理由は定かではないが、中世に流布した人麻呂と赤人を同一人物とする伝説を踏まえたのかもしれない。

では、清はどのように佐竹本を学習したのであろうか。佐竹本は、もとは京都・下鴨神社に伝来し、19世紀初めごろに佐竹家に移ったと考えられており、清が直接目にする機会は無かったと思われる。おそらく佐竹本の模本を参照したのであろう。

京都市立芸術大学芸術資料館には宮廷の絵所預を務めた土佐家の粉本(絵手本)が所蔵されているが、その中には絵師および制作時期不明の佐竹本の写しが含まれており、この写しが清の在京時に光貞の手元にあったとするならば、ひとつにはこの粉本を学習した可能性が想定される。

あるいは、清より先に光貞の門に入っていた、同じ尾張出身の絵師・田中訥言(1767-1823)が描いた佐竹本模本を学んだ可能性が考え得る。訥言は活動の拠点を京都に置いていたが、しばしば名古屋を訪れて長期滞在することがあり、清は兄弟子であった訥言から多くを学んだ。訥言の佐竹本模本は、寛政6年(1794)に制作されており、清の在京時あるいは名古屋帰還後いずれにせよ、訥言の模本を目にすることは可能であったろう。

以上のように、清の師弟関係を考慮すれば、①土佐家粉本の中の佐竹本の写し、②田中訥言筆の佐竹本模本のいずれかを参照し、佐竹本の図様を学習したと推測される。本作品は



図版4 中山養福模写 佐竹本「三十六歌仙絵」山辺赤人 部分 東京国立博物館蔵 Image：TNM Image Archives

清の古画学習の一側面や、近世後期における佐竹本の図様の広がりを考える上で、興味深い資料と言えよう。

本作品は、令和2年(2020)5月27日(水)～6月21日(日)の期間、常設展テーマ10「歌仙絵」で展示します。

名古屋の 凧

長谷川洋一

ここ数年、名古屋市博物館では小学校の冬休みに合わせて、「正月の遊び」という展示を開催している。その内容は小学校1年生の生活科の単元

に対応しており、羽子板やカルタ、名古屋凧とも呼ばれる和凧などを展示している。

現在では、凧揚げという正月の遊びという印象があるが、かつての名古屋では正月に限らず凧揚げが盛んであった。今回は、正月の遊びにとどまらない名古屋の凧文化を紹介したいと思う。

〈かつての凧揚げ〉

明治35年に記された「名古屋の紙鳶」という論文には、「名古屋の紙鳶は季節に関係せぬ、烈々たる炎威熾くが如き日でも、凜烈たる寒風肌を劈く時でも、紙鳶の風箏を聞かぬ時は無い」(香魚市人 1902年 121頁)という記述がある。「紙鳶」とは凧のことであり、かつては正月に限らず凧揚げが行われていたことが分かる。さらに「甚だしいのは夜更けに提灯を點して、上げて居る連中もある」(香魚市人 1902年 121頁)というように、凧揚げ熱が非常に高い時代があったようである。

図版1は現在の名古屋市中区上前津付近で行われた凧揚げ



図版1 「尾張名所図会」前編巻二 館蔵

の様子であり、角凧の他に、鳥や扇子、虫の形をした凧が描かれる。前掲「名古屋の紙鳶」によれば、虫の形をしたベカ、半振、蟬、蛇などが最も古く寛永年間(1624-1644)から行われていたという(香魚市人 1902年 122頁)。創始年代については、その後刊行された名古屋凧に関する文献でも引用されて定説化しているが(長江 1976年、佐藤 1994年)、実際の創始年代はさておき、「アブ」や「セミ」と呼ばれる虫の形をした凧は名古屋凧を代表とするものといえる。

〈名古屋凧の特徴〉

虫の形をした凧のうち、「アブ」と呼ばれる凧とその骨組みが図版2である。全体に丸みのある形であり、竹や檜を素材とする骨組みに和紙を貼って製作される。

虫を題材とした凧は必ずしも名古屋に限られるわけではないが、他地域の凧とは異なる特徴もある。その一つは「風袋」という羽に当たる部分であり、湾曲した和紙が風を受ける構造になっている。また、凧の横幅よりも長く、真横に伸びた弓状の「うなり」も特徴的である。「うなり」とは、風を受けて音を鳴らす部分であり、冒頭で紹介した「紙鳶の風箏を聞かぬ時は無い」という文章中の「風箏」がこれに当たる。

名古屋市博物館が所蔵する名古屋凧の大きさは、縦の長さ



図版2 和凧(アブ) 館蔵

が一尺(約30cm)から二尺(約60cm)程度のものが多いが、大きいものになると三尺(約90cm)、四尺(約120cm)にもなる。一方でハマグリに入るほど小さな凧もある。また、骨組みの基本的な構造は同じであるが、茶壺や人の顔などまったく異なる見た目の凧もあり、虫の形を基本として様々な凧が製作された(図版3)。

凧揚げが盛んであり、多種多様な凧があるのは、名古屋が凧の一大産地だったからである。江戸時代の地誌である『尾張名所図会』では、凧は「其製作の巧なる事他國にまされり」と評価され、「凧は名古屋の名産といふべし」と紹介される。

凧の生産は古くから行われてきたが、名古屋市博物館が所蔵する凧の多くは昭和期に製作されたものである。製作された時期は新しいが、古くから伝えられてきた名古屋凧の技法やデザインに基づいて制作されており、名古屋凧の地域的な特色を現在に伝える資料である。

〈参考文献〉
香魚市人 1902年「名古屋の紙鳶」『名古屋と伊勢(文藝倶楽部、定期増刊8巻14号)』博文館
佐藤昌明 1994年『名古屋古流凧』私家版
長江栄二郎 1976年『古流名古屋凧』私家版

